超高齢社会における八味丸の役割

千葉中央メディカルセンター 和漢診療科（千葉県）
城西国際大学薬学部 医療薬学科 和漢医薬学研究室　地野 充時

八味丸は「腎虚」を改善する代表的な漢方方剤である。「腎虚」は高齢者診療において非常に重要な概念であり、加齢に伴って様々な症状を呈する高齢患者に八味丸の有用性を多く経験している。高齢化の進展が顕著なわが国において、「腎虚」の病態を適切に診断し、八味丸を適切に使用することは今後ますます重要となる。本稿では、八味丸が有効であった3症例を供覧し、高齢者医療における重要な役割を担う八味丸について考察する。

Keywords 超高齢社会、腎虚、八味丸

緒　言

日本は、2007年に高齢化率（65歳以上の高齢者の割合）21%を超え、超高齢社会となった。高齢化率は2022年には29%に上昇しているが、少子化により総人口も減少するため、2050年には38.8%に達すると見られている[1)]。筆者はいわゆる団塊ジュニア世代であるが、筆者自身も15年後には65歳を超えている。われわれの世代では年間約200万人が高齢化するため、その頃までは高齢者の絶対数も右上がりと考えられる。したがって、いわゆるフレイル状態、すなわち様々な機能・予備能低下により健康障害に対する脆弱性が増加している高齢者をどのようにマネージメントしていくのかは喫緊の課題である。

本稿においては、高齢者の漢方治療において重要な役割を担う八味丸について概説する。

症　例

まず初めに、外来でしばしば遭遇する高齢者が訴える症状に対し、八味丸が有効であった症例を以下に提示する。

症例1

73歳、男性。主訴は腰部～臀部の痛み、両膝から下の痺れである。

現病歴は、X－10年頃から腰痛が出現。X年1月、某大学病院整形外科を受診し、MRIにて腰部脊柱管狭窄症と診断。プロスタグランジン製剤の注射・内服にて自覚症状は半減したものの、それ以上の改善が認められないため、X年7月、当科を受診した。初診時の自覚症状は、主訴以外に、こむら返りがある、立ちくらみ、痔があるが痛みと痺れは温まると楽になるとのことであった。他覚所見としては、脈候はやや沈、やや虚、弦、舌候はやや淡白、腫大し、湿潤した白黄苔を被り、腹候は腹力やや軟弱、両側腹直筋緊張、臍上悸、左右臍傍圧痛、小腹不仁を認めた。以上より、腎虚、陰・虚証と考え、八味丸60丸/日（分3）を処方した。2週間後には腰部～臀部の痛みの改善が見られ、服用前には500mを歩くのに1～2回休んでいたが、休まずに歩けるようになったとのことであった。2ヵ月後には腰部～臀部の痛みはNRSが2/10、両膝から下の痺れは1/10に改善した。

症例2

76歳、男性。主訴は耳鳴りである。

現病歴は、X－1年頃から両側の耳鳴りが出現し、近医総合病院耳鼻科を受診したが、異常はなく治療の必要はないといわれた。主訴以外にも、全身倦怠感、四肢の冷え、肩こりなどの症状もあり、X年9月、当科を受診した。

既往歴として、73歳に前立腺肥大があり、夜間尿は1～2回とのことであった。それ以外の初診時の自覚症状は、日中の眠気、立ちくらみ、腰痛、目の疲れがあった。

他覚所見としては、脈候は沈、やや虚、舌候はやや暗赤色で、やや乾燥した中等度の白黄苔を被り、腹候は腹力中等度、両側腹直筋軽度緊張、左臍傍及び臍下圧痛、小腹不仁を認めた。以上より、腎虚、陰・虚証と考え、八味丸60丸/日（分3）を処方した。

2週間後には左耳鳴りの減弱を自覚し、2ヵ月後にはほとんど気にならなくなった。右耳鳴りには変化がなかったが、全体的に体調が良好とのことであった。しかし、胃の重い感じが出現し、地黄の副作用と考え人参湯3包/日（分3）

を併用した。これにより胃の調子も改善し、半年後には耳鳴りは気にならなくなり、冷えも改善して例年の冬よりも過ごしやすいとのことであった。

症例3

82歳、女性。主訴は両下肢の痙攣である。

現病歴は、X年1月頃から睡眠中に両下肢が毎晩攣るようになった。症状は増悪傾向であり、一晩に2～3回攣ることもある。ひどい時には昼間にも下肢痙攣が3～4回起きることもある。寝返りをした時やトイレに行こうとする時に症状が出現する。X年9月、当科を受診した。初診時の自覚症状は、下肢の冷え、排尿回数が多い、夜間尿は4～5回ある、であった。

他覚所見としては、脈候はやや浮、やや虚、舌候はやや暗赤色で微白苔を被り、腹候は腹力中等度、両側腹直筋軽度緊張、小腹不仁を認めた。以上より、腎虚、陰・虚証と考え、八味丸60丸/日(分3)を処方した。

2週間後には夜間の痙攣は多くて2回となり、昼間の下肢痙攣も起こらなくなってきたとのことであった。8週間後には夜間の痙攣が一晩に1回あるかないかになった。16週間後には下肢の冷えも改善し、25週間後には夜間に下肢が攣らないことの方が多くなってきたとのことであった。

なお、症例1、3においては薬剤に起因すると思われる副作用はなかった。

考　察

提示した症例はいずれも「腎虚」と診断し、それに対し八味丸が奏効した症例である。高齢者診療においては、この腎虚という概念が非常に重要となる[2]。漢方医学において、腎とは「成長・発育・生殖能」、「水分代謝」、「骨の形成・維持」に関わる機能単位である。西洋医学の腎臓は「老廃物を尿として排泄する」臓器であるが、これと漢方医学の腎とはその機能が大きく異なっている。腎虚とは、腎の機能が低下した病態、すなわち、生殖能、姿勢保持能、排尿する能力、呼吸能、思考力・判断力、視力・聴力等が低下した病態を意味する。これらは加齢に伴う心身の老朽化により現れてくる自覚症状であるが、具体的には、腰痛、手足の痺れ、夜間頻尿、気力低下、難聴・耳鳴り等がみられるようになる。他覚所見としては、腹診での小腹不仁があり、これが腎虚を診断する根拠となる。小腹不仁とは小腹(臍から下の下腹部)の腹力低下あるいは知覚異常を意味する。また正中部に索状物を触れることがあり、これを正中芯という[3]。このような自覚症状、他覚所見を根拠に腎虚という病態を判定していく。

この腎虚を改善する代表的な方剤が八味丸であり、筆者は日常臨床において多くの高齢患者に使用しその有用性を実感している。八味丸は金匱要略に収載されている処方であり、その条文では、「崔氏の八味丸、脚気上って少腹に入り不仁するを治す。(中風歴節病)」、「虚労腰痛、少腹拘急し、小便不利するは八味腎気丸之を主る。(血痺虚労病)」、「男子の消渇、小便反って多く、飲むこと一斗なるを以って、小便一斗なるは腎気丸之を主る。(消渇小便利淋病)」等がある[4]。古くから脚弱、腰痛、排尿障害等に使用されてきた方剤である。構成生薬は地黄、山茱萸、山薬、牡丹皮、沢瀉、茯苓、桂皮、附子の八味である。体を温める作用のある桂皮、附子が含まれ、滋養強壮作用のある地黄、山薬、山茱萸が含まれることから、陰陽虚実では陰・虚証(太陰病期・虚証)の病態に用いられる方剤である[5]。地黄に関しては、古典的には乾地黄が使用されてきたと考えられているが、今回用いた八味丸では熟地黄が用いられている。熟地黄は乾地黄と比べて補血、滋養の作用が強く、補剤としては熟地黄の方が理にかなっている[6]。また、この方剤は、生薬末を使用しているため、熱水抽出では得られない揮発性成分や脂溶性成分が含まれているということも特徴である。

高齢者においては、罹患している疾患や病態が単一であることはまれである。しばしば複数の疾患が併存しているため、西洋医学のみでアプローチすると多数の薬剤が処方される傾向があり、現代医療においてはポリファーマシーという問題を引き起こしている。漢方治療は、抗病反応を高め生体機能を賦活化する、一連の「補剤」という武器を持っており、臓器横断的に治療を行うことができることが西洋医学より優位な点である。加齢によって様々な症状が現れる高齢者に対しては、補剤の一つである八味丸が有用な症例をしばしば経験する。超高齢社会である本邦においては、適切に「腎虚」という病態を診断し、八味丸を適切に使用していくことが今後ますます重要になっていくと思われる。

附記　本稿の症例にはウチダの八味丸Mを使用した。

〔参考文献〕
1) 平成28年度版 厚生労働白書 https://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kousei/16/dl/all.pdf
2) 寺澤捷年: 症例から学ぶ和漢診療学. 医学書院, 第3版: 92-95, 2013
3) 寺澤捷年: 漢方腹診考 症候発現のメカニズム. あかし出版, 第1版: 101-112, 2016
4) 小山誠二: 古典に生きるエキス漢方方剤学. メディカルユーコン, 第1版: 940-949, 2014
5) 寺澤捷年: 症例から学ぶ和漢診療学. 医学書院, 第3版: 332-333, 2013
6) 鈴木 洋: 漢方のくすりの事典. 医歯薬出版株式会社, 第2版: 190, 2011